

整備内容及び利用状況



整備



つるの湯



早戸駅 の つるの湯

利用状況

屋形船（つるの湯丸）の利用者数  
 H18.7～H19.6 3,470人  
 H19.7～H20.6 4,097人（18%増）  
 つるの湯利用者数  
 H17.7～H18.6 54,268人  
 H18.7～H19.6 63,066人  
 H19.7～H20.6 54,571人

管理状況

平成19年6月7日、早戸温泉つるの湯企業組合、町、県の3者で、県が整備した護岸工等の維持管理に関する管理協定を締結。定期的に清掃、除草を行っています。



の



のつるの湯



整備 つるの湯

関係機関

早戸温泉つるの湯

2	2	2	5	55
2		52	2	
2			55	
2		52	2	

地の 早戸温泉地区

早戸地区

地域づくりの方針

1200年以上の歴史がある早戸温泉つるの湯と“絶景”只見川を最大限活用した地域づくり

主な事業内容

- ・町が**温泉棟を整備**
- ・早戸温泉つるの湯企業組合が**屋形船を購入**
- ・元気ふくしまで**船着き場を兼ねた護岸を整備**



事業概要図

早戸地区整備平面図



**地域の現状**

町の人口のピークは、只見川電源開発や国鉄只見線工事の盛んな昭和25年の約7,700人でしたが、平成15年には約2,300人と3分の1以下に減少しました。過疎化と同時に高齢人口の割合も42%と高くなっていました。  
こうした中、町では地域の資源である早戸温泉を活用した地域づくりを展開しています。

**地域づくりのあゆみ**

- 平 ・ 町による新しい温泉施設棟の建設。  
・ 地域懇談会を開催し、地域づくりの将来の方向性を話し合う中で、風光明媚な只見川の見どころを巡る遊覧船の運航を行うこととした。
- 平 ・ 早戸温泉とJR早戸駅付近の2箇所に船着場を兼ねる護岸工を整備。  
・ 地域懇談会では、遊覧船からの見処を船に乗りながら調査。
- 平 ・ 屋形船「つるの湯丸」が就航。船は県の補助事業である地域ビジネス創出支援事業を活用し、早戸温泉つるの湯企業が購入。  
・ 「只見川山峡21景」の案内看板を整備。  
・ 地域懇談会では、只見川の見処に名前をつけパンフレットを作成。
- 平 ・ 地区住民が遊歩道を整備。併せて植樹を実施。
- 平 2 ・ 対岸の金山町三更（みふけ）集落との連携により渡し舟「霧幻峡の渡し」を復活。

**地域づくりを進めてきた中での課題及び解決策**

- ・ 地域の方にとっては初めてのワークショップ開催だったことから、わかりやすく参加しやすい雰囲気を作るため、1開催のテーマを絞り、資料は活字よりもイメージ図等の絵柄を多用するなど工夫しました。
- ・ 役割分担と効果的な事業の組み合わせなどの連携が屋形船運航実現の鍵でした。

**実施した感想**

事務所の企画調査の担当だけでなく、土木事務所や三島町の職員の方と事業当初から一緒に参加してもらうことができ、その後の整備等に共通認識を持つことができました。

懇談会の運営や、関係機関の連絡調整に苦労しました。

**地区**  
この事業がなければ「山峡下り」は実現できなかったと思います。

**元気づくりの立役者たち**



**事業の効果**

**地 の 遊歩道の整備**

平成19年度には、早戸温泉つるの湯周辺の良好な景観を楽しんでもらうことを目的に、只見川左岸に、早戸温泉地区住民が、ウッドチップを敷いた遊歩道（L=300.0m、W=1.0m）を整備するとともに、広葉樹の苗木の植樹を併せて実施しました。



**の**  
つるの湯温泉企業組合が、屋外に食事施設「ラーメンハウス」を整備し、温泉利用者の利便性を向上させました。

**の**  
平成20年度には、県の地域づくり総合支援事業を活用し、対岸の金山町三更（みふけ）地区との間で45年ぶりに渡し舟を復活させました。この渡し舟は古くから地域住民の足として利用されてきましたが、道路網が整備されて役割を終えていたものです。  
今回は「霧幻峡の渡し」として復活しましたが、次年度から通年での運行を計画しています。



**地域の課題・今後の展望**

毎年、実施している早戸温泉を核としたイベントやボランティアの美化運動は、観光資源「温泉」と文化財「神々の道」をうまく活用し、連携した滞在型観光の促進を目標としたものです。また、地区の高齢化を念頭においた、楽しめる事業活動、小さくても地元の人々が参加できる活動を進めてきました。

しかし、屋形船の収支は、町の補助金を得ていて、単独では赤字となっています（H18、H19実績）。長く継続していくためには黒字化が必要で、利用者5,000人超が目標になります。  
今後は、周辺地区の資源にも光をあて、他の地域との文化や生活のつながりを再発見することで、交流と連携を図りながら、地域づくり活動の輪を広げていくことを目指す必要があります。